

魂の三重奏

YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆



魂の三重奏

中山俊文

目次

魂の三重奏

1

編者あとがき

51

魂の三重奏

中山俊文

イザール・ギルトマンは半世紀以上にわたってヴァイオリン界の巨匠として世界中のコンサートホールで演奏してきた。八十歳をすぎた今も、現役としてステージに立っている。その演奏はさすがに年齢

を感じさせるようになってきているが、演奏会のチケットはそこそこ売っていた。興行主たちも、彼の偉大な名声と、いまなお内面に燃えるものをその演奏に見せることで聴衆を集める力を持っていると思っていたし、全盛時代の彼を知る熱心なファンは、ギルトマンの名を聞けば遠方からでもコンサートに集まるのであった。

彼自身は演奏中に舞台上で死ぬことを理想としてい

たので、引退ということは考えていなかった。しかし、体力的に演奏回数は減り、かつては地球上のどこであろうと苦にしなかった演奏旅行も、遠い国に出かけることはめつたになくなっていた。

イスラエル出身者独特の、魂で音楽を奏でるタイプの演奏家であるギルトマンは、全盛期でも傷のない美音で聴衆を魅了するといった演奏スタイルではなかったが、年齢とともにますます心をむき出しに

してヴァイオリンから音楽を搾り出すといった傾向を強めてきていた。それも、しなやかな肉体を維持している間は、彼の意図するところは、そのまま聴衆に伝わったが、肉体がしなやかさを失ってくるにしたがって、しばしばぎこちなさや乱暴さだけが目立つようになつてきていた。それには不運も手伝っている。七十歳をすぎたとき難病に罹り一年近くも入院生活を余儀なくされたのである。

彼の強靱な生命力は病を退け、驚くべき意志の力で演奏の現場に復帰を果たした。しかし、その病は彼の背骨を大きくひん曲げた。上体は左肩が下がった形に曲がり、これはヴァイオリニストにとっては致命的な障害と思われた。周囲のものはみなこれを機会に引退するだろうと思ったが、本人だけはそんなことは露ほども考えていなかった。そして、リハビリと猛練習とによつて奇跡といわれる演奏活動再開

を果たしたのである。それこそ復帰への執念といふべきであろう。

病に倒れてキャンセルした演奏会からちようど二年目の同じ日に、同じホールで、おなじプログラムによる復帰第一回の演奏会を行ったのである。

それからさらに十年近くあらたなキャリアが付け加えられているのだが、先にも書いたように、残り

火の燃焼がたまに見られることと、高齢にもかかわらず精力的に全身で表現する姿によつて、賞賛を得てはいるものの、すでに過去の人という印象は誰の目にも隠しようがなかった。

そうして世間から徐々に忘れられ始めたギルトマンのために、日本のある音楽企画会社が、彼をメンバーに加えたピアノ三重奏の演奏会を企画した。そして彼以外の二人、つまりピアノとチェロには現在

実力、人気ともに最高の演奏家を組み合わせるとい
う企画であつた。

これを提案したプロデューサーの原田は、魂を揺
さぶるような演奏をするこのイスラエルのヴァイオ
リニストを心から尊敬しており、何とかもう一度こ
の人の完全燃焼の場を作りたいと考えたのである。
現役を続けているとはいつても年令を考えると、は
やくしないとそのような企画のチャンスは永久に失

われる。原田は是非とも出来るだけ早い時期に実現したいと考えていた。

しかし、企画会議にこのアイデアを出した時には、予想通り猛反対を受け、笑いものにさえなった。そもそも老大家と付き合わされる若い方の二人、しかも原田の言う条件に適うような演奏家が、そのような共演を引き受けるはずがないと言うのが反対の主な理由であつた。

実際、一流の演奏家たちは、自分がトップレベルであることを自覚すればするほど、共演者が誰であるか、どんなレベルの、どのような評価を受けている演奏家なのかを問題にするのがこの世界の常である。原田は、もちろんこのアイデアを会議にかけるまでに、その実現性を内々に調べていた。たしかに打診した何人かの一流といわれる演奏家たちは、ギルトマンの名前を聞くと申し合わせたように、光栄なお

話なのでまことに残念だが、と前置きしながらスケジュールの都合が付かないことを理由に、断つてきた。もちろん原田もこの業界の人間である。そのよ
うな売れっ子たちの主だったスケジュールは調べた
上での打診であつたが、もつともらしい理由による
丁重な辞退であつた。辞退の理由が本当であるにせ
よ、だれもがその老大家の名前を耳にしただけで、
背中のひん曲がつた枯れ木のような老人が、態度だ

けはでかく、ロマンティックなフレーズもおかまいなしに乱暴に弾き飛ばすイメージを思い浮かべるのであつた。

しかし、原田は諦めずに根気よく共演者を探した。まず共演してもいいと言うチェリストが見つかった。マウリッツイオ・ポーロである。ポーロは、いま世界で最も評価が高いといつて過言ではないイタリアのチェリストである。たまたま原田の同僚のプロデ

ユーサーが担当するコンサートツアーのために来日することが決まっていたのだった。ポーロなら実力、人気ともに問題なしと踏んでいたのに、思ったほどコンサートの引き受け手が集まっていなかった。フランス育ちの中国系チェリストや、ロシア出身でキリスト顔のユダヤ系チェリストのように、毎年のように来日しているのに、目の飛び出るほど高いチケットが完売を続けているという風には行かないよ

うである。したがって、日程の調整も何とかかなりそ
うである。本人がいいと言うのだから、プロデュー
サー同士の了解は問題なく付いた。

ピアニストはこれまでに自分が企画した演奏会に
出演した中から当たったところ、ひとり是非共演し
たいと言うピアニストが見つかった。輝かしいコン
クール歴を持ち、実力は勿論、人気の点でも非常に
高い日本の女流ピアニストの第一人者小谷有紀であ

る。原田は、共演者に当たりが付いたところで、再び企画会議に提案した。今度は、すんなりと企画は通った。

しかし、これを実現させるためには、三人のソリストの日程を調整するという困難な仕事が残っている。特に今回はすでにチェリストの日本ツアーの日程がほとんど決まっております、後の二人の日程をこれに合わせる形になる。日程の調整の段階で実現不可

能になる企画は珍しくない。原田は演奏家三人はもとより演奏会場などとの気の遠くなるようなやり取りの結果、二回のリハーサルと本番の日程と、それぞれの会場の確保にこぎつけた。

イスラエルの老ヴァイオリニスト、絶頂期のイタリア人チェリストそれに日本を代表する女流ピアノリストの三人によるリハーサルは、それぞれの多忙な

日程の合間を縫うようにして本番の五日前と前日の二回行われることになっている。あとは本番当日のゲネプロである。

本番五日前の午後、原田が準備した練習スタジオで三人は初めて顔を合わせた。

若い二人の演奏家は、老大家ギルトマンについてそれなりの知識を持っていた。特にポーロは、同じ弦楽器奏者としてギルトマンを尊敬しており、演奏

会で聞いたこともあった。完全に独自の世界を作り上げている巨匠らしく、評判も何も気にしない入魂の演奏ぶりを気に入ってもいた。だから、今回の話を彼は大変喜んだのであった。

小谷の方は、一応大家として名前を知っていて、ギルトマンのCDを持っていると言う程度だった。ギルトマンの方はといえば、ポーロの評判は聞いているので共演できて嬉しいと言ったが、小谷につい

ては名前を聞くのも初めてということであつた。

三人は、初対面の挨拶をにこやかに交わした。老大家は、美しいピアニストをひと目見て、すっかり気に入つたようであつた。それもあつてか、練習中も上機嫌で、和やかな雰囲気のスタートとなつた。

颯爽と背筋を伸ばした若い二人に対して、老大家はがっしりした骨格を持つてはいたが、背は低く前にも書いたとおり背中曲がり、足も万全ではない

らしく左足をやや引きずるように歩いた。おまけによれよれのうわっぱりを着流しているので、一層風采が上がらなかつた。三人はこの日練習に当てられている四時間の使い方を簡単に打ち合わせるとすぐに練習に入った。世界を舞台に活躍する人たちは実質的だ。

ギルトマンは誰よりも早く楽器を取り出すと、忙しく調弦をはじめた。そのやり方はいささか乱暴で

あり、喧しくさえあつた。彼はヴァイオリンを試し弾きしながらスタジオ中を歩き回つた。他の二人もそれぞれ準備ができていよいよ初めて曲を合わせる段になつた。

演奏会のメインプログラムとなるのは、ギルトマンの希望もあつてチャイコフスキーの『偉大な芸術家の思い出に』と表題のついた三重奏曲で、演奏の難しさでも知られている曲である。コンサートでは、

三人による演奏はこの三重奏曲だけで、他にはヴァイオリとチェロがそれぞれピアノの伴奏で独奏曲を弾くことになっている。

三重奏の練習が始まった。ピアノが静かに前奏を始めるるとすぐにチェロがチャイコフスキーらしいメランコリックなメロディを夢のような音色で奏でる。やがてヴァイオリンが引き継いで同じメロディを弾く。チェロに比べて如何にも雑な弾き方に聞こえる。

少し先まで進んだところで、ギルトマンは弾くのをやめ、

「よし、この調子でいこう」

と言って、ぱらぱらと自分の楽譜をめくった。国籍の違う三人の練習は英語で進められた。

ギルトマンは、ずっと先の練習番号のところを示して、二人に促した。初合わせでは、お互いの音楽の傾向がわからないし、楽譜があるとはいえ、曲を

どう弾くか、つまり曲の解釈も三人が同じというこ
とはないので、とりあえず全曲通すのが常識と考え
ていたポーロと小谷は少し戸惑った。しかしその場
は、老大家に従った。今度もしばらく弾いただけで、
「オーケイ・・・」
と言ってあわただしくページをめくり、次の箇所を
みなに指示した。このように数箇所をつまみ食いの
ように弾いただけで、

「素晴らしい、今回皆さんとアンサンブルできて光栄です」

と言いながら、三重奏曲の譜面を閉じてしまった。その間わずか三十分足らず。そして、ソロの曲の練習に入ってもいいかとみなに聞いた。原田が三重奏の練習はそのあとにするのかと聞くと、それは今終わったではないかという返事が返ってきた。

ヴァイオリン独奏曲の練習に入った。ポロロは、

原田にひとこと耳打ちしてから、立ち会っていたツアー担当のプロデューサーと部屋を出て行つた。

原田は、ギルトマンのマネージャから託つた数曲のヴァイオリン曲のピアノ伴奏譜を小谷に渡してある。小谷がそれらの楽譜を取り出すとギルトマンは、

「これ」

と、その中の一曲を指で示した。その曲から練習を

始めようと言うのである。クライスラーの小品であった。軽快な動きの愛らしい曲である。ギルトマンは冒頭の主題をごく普通の聞きなれたテンポで弾き始めたが、主題の後半の下降音形を滑り台から勢いよく滑り降りるように目にもとまらない速さで弾いた。小谷はあまりにその変化が極端だったのでついていけなかった。ギルトマンはにやりとして演奏をやめると、

「私はそのときの気分でどう弾くかわからないので、合わせてください。集中して一緒に音楽を進めていければ、あなたには私がどう音楽を進めるかが必ずわかります」

と言い、さらに続けて、

「お渡しした曲は、どれも知っていますか」

と訊ねた。小谷が一応どの曲も知っているし、弾いたこととも言おうと、

「オーケイ、では今日の練習はこれでいいですね」と言つて、さつさと楽器を片付け始めた。小谷が、「では次はコンサート前日のリハーサルですね」と言うのと、

「私は前日の練習は必要ありません。あなたはどうしても必要ですか」

と訊き返した。小谷が口籠っていると、ギルトマンは、

「では、コンサートの日にお会いするのを楽しみに
しています」

と言つて、さつきから部屋の隅の椅子に腰掛けて待
つていた彼の世話役の若い女性に、

「私のホテルに案内してください」
と言つて、部屋を出て行つてしまった。

ヴァイオリンの練習があまりに早く終わったので、
慌てて戻つてきたポーロが、楽器の準備をしながら

小谷に、ヴァイオリンの練習の様子を流暢な英語で訊いた。小谷が、三重奏の場合と同じでほとんど弾かなかつたと答えると、ポロ口は、

「ああいう大家は本番の演奏を緊張感の高いものにするために、わざとあのようにする場合があるから、われわれも神経を研ぎ澄ませて三重奏をいい演奏にしましょう。しかし、われわれはせつかく時間があ
るようだから、たっぷり練習しましょう。というよ

りアンサンブルを大いに楽しみましょう」
と言うのだった。二人は、本番で弾くピアソラの曲
の練習を始めた。

本番までもうリハーサルはいらないと言っていた
ギルトマンからの連絡が、原田のところに入ったの
はコンサート前日の朝だった。やはりリハーサルを
したいと言うのである。原田はあわてて小谷とポー

口に連絡した。幸いに二人とも別の予定は入れていなかった。

三人は、前回と同じスタジオに集まった。今度はすべての曲を終わりまで通し、いくつかの箇所は戻して練習した。ギルトマンの極端な、よくいえば大胆な表情付けのために合わないところは随所に残った。それでも、小谷とポーロにとっては一通り全曲弾いたことでかなり安心できたのであった。

演奏会当日、三人は打ち合わせどおりの時間にホールに集まり、ゲネプロに取り掛かった。このときも、はじめての練習のときと同様、ごく簡単にホルの響きなどを確かめただけで、リハーサルは予定時間の七割を残して終わった。この段階になっても小谷は、あらかじめ渡されているヴァイオリン独奏曲の楽譜のどれを本番で弾くのか決められていなかった。本番では二曲弾くということだけがわかって

いた。ギルトマンはその場で決めると言うのである。

演奏会は満員の聴衆を迎えて始まった。プログラムの最初は、ポロロが小谷の伴奏でピアソラのタンゴを一曲弾いた。さすがにいま油の乗りきった名手と思わせる見事な演奏で、聴衆の気分を早くも乗せてきた。

そして老大家がヴァイオリンを左脇に抱え、弓を

持った右手を大きく振りながら、美しいピアノストを伴って舞台に現れると、会場は大きな拍手で二人を迎えた。

荒っぽく調弦をすませたギルトマンは、いきなり聴衆に向かつて、

「愛の歌から始めましょう。『愛の悲しみ』、クライスラーの作品です」

と言った。もちろん英語である。それを聞いて、小

谷はいそいで開いていた楽譜を差し替えた。事前の打ち合わせもなかったので、別の曲の譜面が乗っていたのである。ギルトマンがあまりにも感情を込めて、あまりにもゆつくりとしたテンポで、間を取りながら弾くので、小谷は懸命に流れを汲み取ろうとしながら合わせるのだった。二曲目はピアノの譜面立てに並べられた残り四曲の楽譜の中から、あれこれ迷いながらギルトマンは一曲を指定した。そして

また聴衆に向かつて、

「こんどもクライスラーの曲で、『美しいロスマリン』を弾きます」

と言うとすぐにヴァイオリンを構えた。小谷はまたあわてて楽譜を開いて、ヴァイオリンの第一音に間に合わせた。耳をそばだて、ヴァイオリニストの動きをうかがいながら伴奏する小谷をしりめに、ギルトマンは自由自在に曲の気分以身を任せて弾き終え

た。二曲の予定だったので、ギルトマンとともにやんやの喝采にこたえた小谷が退場しようとする向きを変えた。とたん、ギルトマンにとめられた。小谷はうながされてもう一度ピアノの前に座った。ギルトマンはピアノの上の譜面をめくりながら、また曲を選び始めた。もう一曲弾くつもりなのだ。なかなか決まらない。聴衆のほうを振り向いて、ちよつと待ってね、というようにちよこんと頭を下げ、また曲を

選り始めた。やつと決まつた曲は、サラサーテの『ツイゴイネルワイゼン』であつた。これまでの二曲以上に自由な雰囲気を持ったジプシー風の曲なので、さすがの小谷も随所でヴァイオリンとずれた。そして猛烈な勢いで盛り上がって終わる最後の音は完全に二人別々になつてしまつた。小谷とギルトマンは顔を見合わせると、改めて最後の音を、今度は同時に鳴らした。会場がどつと沸いた。ギルトマンは

小谷の肩を抱きながら拍手に答え、満足そうに退場した。

良くいえば型どおりの演奏にない面白さではあつたが、まじめに評するならややハチャメチャな演奏である。だが、それなりに聴衆を喜ばせる前半であつた。

プログラムの後半はチャイコフスキのピアノ三

重奏曲である。演奏時間が四十分以上の大曲で、しかも作曲者が、自分の尊敬する大音楽家の死を悼んで書いた音楽である。前半のギルトマンの演奏振りからみて、いったいどんな演奏になるのか想像もつかない。その意味でも聴衆は不思議な期待感を持って演奏を待った。

ピアノの静かな前奏に続いてチェロが夢のように美しい弱音で憂愁に満ちた歌を奏した。聴衆は早く

もここで心をつかまれた。やがてヴァイオリンが同じメロディを引き継ぐ。チェロに比べると明らかにぶつきらぼうだ。しかし、演奏が進むにしたがって、ギルトマンの表情が引き締まってきた。音楽の中に入り込んできたのである。もはやそこにいるのは皺だらけで歪んだ肉体の老人ではなく、音楽の化身が、物語るように音を紡ぎだしている姿である。他の二人も、いまは老大家に合わせようと苦勞している共

演者ではなく、音楽の流れに身を任せきって演奏している。小谷の、音楽に心を揺さぶられながら弾く表情が美しい。ポロもギルトマンと心がひとつになっっている。チェロがヴァイオリンに合わせるだけでなく、ヴァイオリンもチェロに呼応しながら歌っていく。神が彼等の肉体を借りて、音楽を作り出しているとしか言いようのない雰囲気がある。ホールの広い空間を支配していた。会場は水を打ったようだ。す

べての聴衆が今鳴っている音楽の世界に入り込んで
いるのだ。

冷静になつて細かいことを言えば、曲の途中でギ
ルトマンがヴァイオリンを構えなおすような予測外
の動きをしたために、小谷が次を弾きはじめるタイ
ミングを失つて待つてしまふような場面もあつたの
だが、完全に演奏者と聴衆の中に大きな流れとなつ
ている音楽にとつて、些細なことは何の障碍にもな

らない。

聴衆の心をしつかりと捉えながら曲は、長いながい終幕の余韻を残して消えていった。

二千人近い人がぎっしりと入っているのに、物音ひとつない沈黙がしばらく続いた。演奏者が弓を下ろしたのをきっかけに、ようやく沸きあがるように拍手が起こり、それが耳を聳するばかりに大きくなり、ブラボーの声もいつ果てるかと思うほど続いた。

万雷の拍手の中、ギルトマンは小谷とポーロの手をとって何度も拍手に答えた。共演者の若い二人は老大家への賞賛を邪魔すまいと彼一人を前の方に押し出そうとするが、ギルトマンはそれを強く断つて二人の手を引いて三人で拍手に答えた。そして、彼は譜面台からたったいま弾き終えたばかりのチャイコフスキーの楽譜を手に取り、それに接吻をした。それはまさに音楽そのものが自分たちに演奏をさせ

たのだと言っているようであつた。

そして、足を引きずり、背を丸めたもとの老人の姿で、二人にささえられるように下手に下がつていった。

会場が一番後ろの席で聞いていた原田は、往年の名画『赤い靴』の一場面を思い出した。

夜の大都会の、ごみの散らばった道端に落ちてい

た新聞紙が、風に吹かれて巻き上げられるとたちまち男性バレリーナの姿になり、赤いバレエシューズを履いたプリマドンナと見事に踊り、踊り終えると、またもとの新聞紙に戻る。

原田は、あれは古い映画だが、カラーだったかなとちよつと考えてから、そつと目頭を拭うと楽屋に向かった。

完

（この物語はすべてフィクションで、実在する人物などとは関係ありません）

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

※2 ペンネーム「中山俊文」について

著者、山中與隆は、過去において「小説家になるう」のサイトに「中山俊文」のペンネームで投稿し

ていた時期がありました。また別場所ではその他のペンネームも使用していたようです。一連の作品の出版開始に当たっては、著者名はデータ管理上一つに統一するべきとのことで「山中與隆」に統一しております。しかし、例外として今回続けて出します五つの短編については、過去におけるウェブ上発表の事例がありますので、本の中では著者名を「中山俊文」とさせていたただいておりますことをここに記

します。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

魂の三重奏

2022年6月20日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元 illustAC/photoAC/silhouetteAC

タイトル:ステージのカーテン背景

作者:fujiwaraさん

素材のID:23805752

タイトル:ピアニスト

素材のID:188959

タイトル:バイオリニスト

素材のID:160387

タイトル:チェロ

素材のID:105323

© Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
